

研究ノート

ピクトリアル・ターンとしてビジュアル・リサーチ・メソッドの可能性 — アートベース・リサーチとしての位置づけの検討に向けて

Visual Research Methods as Pictorial Turn

— A research note considered Visual Research Methods as the position of Arts-Based Research

佐々木 樹（産業文化研究センター研究員）

Miki SASAKI (Researcher, Research Center for Industrial Culture)

キーワード アートベース・リサーチ、ビジュアル・リサーチ・メソッド、質的研究、視覚論的転回、画像論的転回

Keywords Art-Based Research, Visual Research Methods, Qualitative Research, Visual Turn, Pictorial Turn

1. はじめに

本稿はアートベース・リサーチ (Arts-Based Research: 以下ABRと表記) のアプローチのうちに、ビジュアル社会学 (Visual Sociology) の方法論の一つであるビジュアル・データを研究の素材ないし対象としたC・ノウルズらによって発展されたビジュアル・リサーチ・メソッド (Visual Research Methods: 以下VRMと表記) を位置づけするための検討である。

教育学分野・社会学分野・芸術学分野を中心として新たな質的研究の形として実践されている、芸術制作や表現を学術研究や知の創出方法として位置付けようとすることを目的とするABRは、創出されるものの方法や実践の多様さから一つの明確なタームや形態を持つものではなく個別具体的に発展して別々のタームや形態で展開されている。ABRの持つタームや形態の多様さはABRの実践が広い学問範囲で行われていることや異なった領域ごとにおける転回 (Turn) としてのABRへのアプローチがあることに起因する。

2. ABRの系譜とABRとしてのVRMの現状の位置付け

ABRは1990年代よりE・アイズナー、T・バロンらより芸術と教育の質的研究の一つの転回として理論的に展開された。岡原はABRについて1960年代から社会学や教育学、心理学などでの量的研究ではない別の数値に変わる研究方法が求められるようになった過程がABRの背景にあることを記述している。(岡原 2016) 笠原はABRの発展の背景には実証主義研究に基づく人文科学の既存研究に対抗した認識論的転回による質的研究の取り組みがあることを記述している。(笠原 2019) ABRはこうした質的研究のパラダイムシフトと密接に結びつきながら発展しているが、学問的には教育学の観点からのABR、社会学の観点からのABRが大きな発展を見せてい

るものとしてある。

教育学の観点からのアプローチとしてのABRは小松(2018)による「芸術的省察による研究」「芸術に基づく研究」とABRに訳語を当てた美術教育の実践や、直江 (2010) による芸術と国語教育の連携を通じた言語学的な分析としてアートライティング (Art Writing) の実践がある。また直江の実践(2010)のような記述する行為に着目したものとしては、笠原によるR・L・アーウィンが提唱した芸術家 (Artist)・研究者 (Researcher)・教育者 (Teacher) の頭文字をとるアートにまつわる・アートを通じた記述行為であるアートグラフィ (A/r/tography) のようなABRの実践もある。アートの側からの社会学への接近として、岡原はC・エリスによる感情的社会学 (Emotional Sociology) のアプローチを発展させた研究のアウトプットを小説や詩、写真や映像、インスタレーションなどアートの形態として、自己や他者を再構成した追体験の世界であるとし、それをアートベース社会学として展開している。(岡原 2020) ABRの実践は教育学・社会学・芸術学と領域横断的にあることに加えて、そのアウトプットの形態や実践の多様さが見られるだけでなく、アートによる質的研究やアートとしての質的研究の形態を持った (もしくは結果として持つことになった) 実践を全てをABRという用語に包括している現状が見られる。

VRMはC・ノウルズらの研究 (2004) によって提起された写真や映像などを用いた社会的なアプローチの質的研究法であり、後藤の研究 (2009) によって継承的に発展された。ノウルズらはデータの形態であれ、さらなるデータを生み出す手段であれ、あるいは「結果 (Results)」を表す手段であれ、ビジュアル・メソッドが調査過程の不可欠なパートであり、ビジュアル資料を生み出し利用する調査をする (ドゥーイング・リサーチ) の方法を含むものと定義している。(Knowls

& Sweetman 2004=2009:7-8) ノウルズらによって提起されたVRMはビジュアル・データによるリサーチによって感応力 (Sense of Wonder) が高められることによって小さな物語が立ち上がることで、ビジュアル・データを見ることによる社会学的想像力の働きの促進からの社会・世界の理解の可能性を持つものであるとしている。(Knowls & Sweetman 2004=2009:11-12) 岡原はノウルズらのVRMを用いた実例がABRとして考えられることに触れている。(岡原 2016) ABRの現状での発展の分類については笠原の研究 (2019) で前述したもののほかG・サリヴァン (2009) のArt as researchやS・フィンリー (2005) のArts-Based InquiryなどほかABR実践のタームはまとめられているものの、ABRとしてVRMの位置付けについての具体的な検討は現状見られていない。

3. ビジュアル社会学としてのVRMの特徴と現状の位置付け

ビジュアル社会学 (Visual Sociology) は記録技術の発達とデバイスの普及による写真・映像などが一般化したことにより広がりを見せた視覚的なものやことを社会学的に分析する分野である。ビジュアル社会学はビジュアル・データの収集・ビジュアル文化の研究・ビジュアルを用いたコミュニケーションの研究の3つの方向性がある。D・A・ハーバー (2012) は文化が生み出す視覚的なメディアやデータを社会学的に分析すること・社会学的な理解のための視覚的なメディア・データの使用としており、イメージやコンテンツ分析、写真史や映像史研究も含まれる。L・ポーウェル (2010) は視覚的なデータの収集と分析を社会学の対象に含めることとしている。ここにはカメラや携帯電話を始めとする記録技術を用いたデータ収集・調査者が収集した記録データの編集・写真や映像などを媒介物とするフォト・エリシテーション (Photo Elicitation) やフォト・ボイス (Photo Voice) などが含まれ、コミュニケーション研究や人類学的なエスノグラフィー研究としてもある。

VRMの特徴は、写真や映像などビジュアル・データの分析を対象とするが、映画やテレビ、文学や絵画などのような既成のビジュアル・イメージについてすでに存在するビジュアル資料を用いた記号論的読解や内容分析を行うことではなく、調査者 (あるいは被験者) 自身による現地調査を伴ったビジュアル・データを使用することに限定するという点にある。そのためVRMを単なる質的研究法ではなくビジュアル社会学のうちとして捉える場合、VRMはビジュアル社会学の3つの方向のうちのビジュアル・データの収集とビジュアルを用いたコミュニケーションの研究にあたるといえる。ノウルズらのVRMを継承的に発展させた後藤はVRMを使用した手法が「イメージを解釈する方法」と「イメージに基礎を置いた調査」に分けられることを提起している。(後藤 2009) 後藤

はノウルズらのVRMをもとに「イメージに基礎を置いた調査」として、写真を使用した集合的写真観察法で『写真で語る「東京」の社会学プロジェクト』(2009) の実践をしている。後藤のプロジェクト実践では具体的な社会ないし世界のビジュアル・データの観察と記録を通じて、調査者自身の私的な問題や関心を社会的な問題や関心ごとに結びつけて社会学的想像力を養うことや、特定のイメージに対する調査者それぞれで異なるビジュアル・データの収集を通して集合的記憶 (Collective Memory) や集合的意図 (Collective Intentionality) の形成・発見をすることが目的となっている。このことは「イメージに基礎を置いた」VRMといえるが、類似する調査として安川による自叙的写真観察法を用いた『わたしをみるわたし』のフィールド調査 (2009) が他に挙げられる。この調査では生活世界における視的な経験を、ビジュアル・データを使用した自叙的イメージの観察・記録を通じて活性化させることで、視的経験のあり方を探究すること自我アイデンティティ (Ego Identity) や自己アイデンティティ (Self Identity) の構築・分析がなされている。後藤や安川の例から判断できるように、VRMを用いた調査の実施では調査者自身および被調査者がビジュアル・データを生み出す作業が必要とされることから、用いるビジュアル・データを生み出す際のデータを生み出す者について検証することでもあるため、データを取り扱うもののうちに形成されている意味や意図、言語や感情の動きが干渉しているものといえる。VRMの意図は調査によって得られたビジュアル・データを通じた観察 (Observation) から、自己または世界を再帰的に発見・構成するという働きに着目したものであるが、一つのビジュアル社会学研究の方法として使用されるケースが多く、一つの独立した領域として検討された事例はない。

4. 画像論的転回としてのVRMの可能性

VRMを方法論としてだけでなくABRの一つの領域として発展させるための再検討には、後藤の提起するVRMの特質である「イメージを解釈する方法」や「イメージに基礎を置いた調査」によって得られたデータ自体が、再度ビジュアル資料として用いて記号論的読解や内容分析を行う際に使用されることに着目する必要がある。VRMが引き起こすこの二重性 (あるいはそれ以上) は、視覚論的転回 (Visual Turn) に依拠している。視覚論的転回は視覚ないし視覚文化が社会的制約から相対的に自律性を持った領域・分野として扱われることを目指す検討であり、視覚性 (Visuality) に関するものである。小松はABRの背景にある一つの方向性として視覚論的転回があることを記述している。(小松 2018) 視覚論的展開について梅原はW・J・T・ミッチェルが提起した画像論的展開 (Pictorial Turn) と、ミッチェルの影響を受けたJ・C・アレ

キサンダーにおける図像論的転回 (Iconic Turn) の二つがあることを記述している。(梅原 2018: 68-77)

W・J・T・ミッチェルにおける画像論的転回はスペクタクル化した社会におけるイメージ一般やイメージ自体との関係・イメージの観察・イメージの効果についての再検討から始まった画像を通じた「社会的な場の視覚的構築」(the visual construction of the social field) に関する議論 (Mitchell 2005) である。ミッチェルは自身のイメージ研究において、イメージを喚起するものをイメジャリー (Imagery) として、図示的イメジャリー・光学的イメジャリー・知覚的イメジャリー・心的イメジャリー・言語的イメジャリーの5つの種類があるとしている。(Mitchell 1986) 画像論的転回は図示的イメジャリー・光学的イメジャリー・言語的イメジャリーから発展したもので、図示的イメジャリーは絵画・彫刻・図案、光学的イメジャリーは鏡・投射像、言語的イメジャリーは隠喩・叙述・図から現れるものである。ミッチェルのイメージ研究の主題にあったのは、イメージとは何か・イメージと言葉の間の差異は何かということであり、図示的イメジャリーと言語的イメジャリーの2つの方向から展開される図像論的転回に近いものであった。画像論的転回は図像論的転回に光学的イメジャリーの問題が加わる形で発展し、画像自体が何を欲しているか (What Do Pictures Want?) の問いから始まった、画像の人格を問うものである。(Mitchell 2005) このことから「イメージを解釈する方法」は図像論的転回の領域に、「イメージに基礎をおいた調査」は画像論的転回の領域に分けられるといえる。

P・ブルデューは写真が潜在的幻想としての側面と顕在的画像としての側面を持つことに触れて、自律化 (Autonomisation) された写真の利用が困難であることを指摘しているが (Buldeau 1966) ミッチェルにおける画像論的展開はブルデューのいう潜在的幻想としての側面が図示的イメジャリーと言語的イメジャリーによる図像的なものの検討から自律化した顕在的画像へのシフトをすることへの検討と同義であると考えられる可能性がある。顕在的な画像の自律化の困難さは、社会において画像が存在しうる以上また画像を解釈する者が社会的存在である以上、画像自体の解釈に社会的なものが無条件にも介入してしまうためであるが、画像自体に人格があるとするのであれば言語的な対峙によるものだけでなく画像自体が社会的な存在であるものとしての検討もより深める必要があると考えられる。

5. 今後に向けて

画像論的転回について図像学的転回との比較を通じた研究は見られるものの、画像論的転回における画像の人格を問うものはまだ多く発展されてはいない。画像論的転回のように画像自体が人格を持つものとしてとして画像を検討する場合には、ノウルズに触れているようにA・ギデنزにおける再帰的近代化 (Reflective modernization) の問題 (Giddens 1994) と隣接的な関係にあることに立ち返り、社会的なものから一つの人格が構築されるアプローチについて再検証する必要があると筆者は考える。再帰的近代化は生きている個人、組織あるいは社会が近代化とそれ以前のプロセスを内面化していく二重写しの現象・状態のことを表す再帰性の問題であるが、画像自体に人格があるとすれば、そこには画像自体にも再帰性が働いていることになり、二重(あるいはそれ以上)の現象・状態のレイヤーが画像自体に無条件に存在していると考えられる。また画像論的転回は言語的なものと社会的なものとの対峙した自律した視覚性への問いであるが、社会的なものとの対峙が検討されたアプローチは多くない。

ABRの多様な展開にはアプローチとして社会や世界に働きかけをするものが多く見受けられるが、多くは実践者自身があるアクションを通して発生した現象を個人のうちに内面化していくプロセスに重きを置いたものであることが現状である。VRMをABRの一領域として成立させるためには、アクションを通じて得られる面々が一つの集合(あるいは複数の世界)になる動きとレイヤー構造を検証する必要がある。またその際には、動きそのものにおいて生じている再帰性の動きを検証した上で、他領域で語られている転回と関連づけての検討も必要である。

一つのテーマを持ってある社会における現象の画像による検証を通じて個人の立ち位置を検討したり、ある個人に内面化しているものを画像化させて世界との距離を測った生きている社会の「結果 (Results)」を多面的に集合させる方法としてある「イメージを解釈する方法」と「イメージに基礎をおいた調査」という二つの側面を持つVRMを画像論的展開から克服することは、VRMをABRにおける一領域として確立させるための必要条件の一つとしてはもちろんのこと、画像論的転回後のビジュアル・イメージの取り扱いにおける検討の一つとしてある。

参考文献

- Bourdieu P., 1966. *Un art moyen: essai sur les usages sociaux de la photographie Ideology* (=1990, 山縣熙・山縣直子訳, 『写真論 その社会的効用』法政大学出版局.)
- Mitchell W. J. T., 1986. *Iconology Image, Text, Ideology*. (=1992, 鈴木聡・藤巻明訳, 『イコノロジー—イメージ・テキスト・イデオロギー』勁草書房.)
- Foster H., eds., 1989. *Vision and Visuality: Discussions in Contemporary Culture* (=2000, 樽沼範久訳, 『視覚論』平凡社.)
- Ellis C., 1991, *Sociological Introspection and Emotional Experience*, Symbolic Interaction Vol.14 (1).
- Beck U., Giddens A., Lash S., 1994. *Reflexive Modernization-Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order* (=1997, 松尾精文・小幡正敏, 叶堂隆三訳, 『再帰的近代化 近現代における政治、伝統、美的原理』而立書房.)
- Mitchell W. J. T., 2005. *What Do Pictures Want?: The Lives and Loves of Image*, The University of Chicago Press.
- Finley S., 2005. *Arts Based Inquiry: Performing Revolutionary Pedagogy*, Sage Handbook of Qualitative Inquiry, pp.681-694.
- 後藤範章, 2009. 「ビジュアル調査法の展開と可能性—集合的写真観察法」『新情報』No.97, pp.6-13.
- 安川一, 2009. 「視的経験を社会学するために」『社会学評論』Vol.60 No.1, pp.57-72.
- Sullivan G., 2009. *Art Practice as Research: Inquiry in Visual Arts*, SAGE Publications Inc.
- 直江俊雄, 2010. 「アートライティング教育の波及と課題：後期中等教育におけるエッセイコンテスト参加者の動向」『美術科教育学会誌』Vol.31, pp.251-264.
- Knowles C., Sweetman P, eds., 2004. *Picturing the Social Landscape Visual Methods and the Sociological Imagination* (=2012, 後藤範章監訳, 『ビジュアル調査法と社会学的想像力 社会風景をありありと描写する』ミネルヴァ書房.)
- Alexander J. C., 2010. *The Celebrity-Icon*, Cultural Sociology Vol.4 (3), pp.323-336.
- Barone T, Eisner., W. Elliot., 2012. *Arts Based Research*, SAGE Publications Inc.
- 岡原正幸・高山真・澤田唯人・土屋大輔, 2016. 「アートベース・リサーチ 社会学としての位置づけ」『三田社会学』21号, pp.65-79.
- 梅村麦生, 2017. 「文化社会学の視覚論的転回と社会的世界の視覚的構築：画像と図像の議論から」『金城学院大学論集(社会科学編)』第14巻第1号, pp.67-83.
- 小松佳代子, 2018. 『美術教育の可能性—作品制作と芸術的省察—』勁草書房.
- 笠原広一, 2019. 「Arts-Based Research による美術教育研究の可能性について その成立の背景と歴史及び国内外の研究動向の概況から」『美術科教育学会誌』Vol.40, pp.113-128.
- 岡原正幸, 2020. 『アート・ライフ・社会学：エンパワーするアートベース・リサーチ』晃洋書房.